谷枝葉

和書門
類 二八
號 二九
函 八六
架 七
冊 一八

内閣文庫
和書
類 二八
號 二九
冊 一八
函 二四
架 二
(九六)

内閣文庫
番號 和 28129
冊數 18 (9)
函號 214 6

国立公文書館
National Archives of Japan

端詞集　操早川繁叔話
永明閑記　雲井物語
梅花柳水　世間妓気質
峰の初花　小栗宴記
倡客穀学問　忠孝端國物語
河溝浦三記　彩永代蔵
長者宮気

端詞集

明治十五年時事

来二

南亭主人輯

人道の学ぶこと、先身相慈しむ者なり、されば瑜伽論一百巻
みな是れ慈悲の二字を流れ出でたる金言なり、古人道へて
曰く、一切衆生皆我が一子なり、我国人民皆我が一子なり、
早きこと高麗高麗なり、高麗高麗なり、つつしみ通ての家
業を勤めて百姓を撫育し、ここに礼儀を弘めて人の馬牛をも天晴
所を学ぶ義先づ是れ人の道なり、心根を深くこれを思ひ

ひら高麗ひ年甲斐なく知行をもつの弟なれ乱暴振舞すべ
き様に指ゝ人の上四ゝ人物者ふ様に成の動
ハ力倫たいこ拵の動と成ゝ様ゝ有ゝ家事ゝ行ゝ
一ゝ出ゝ居ゝ様ゝ腐ゝ拵ゝ職ゝ為ゝ高ゝ高ゝ知
四ゝ有ゝ
地ゝ様ゝ踏ゝ為ゝ高ゝ嘲ゝ事ゝ家ゝ有ゝ為ゝ歌ゝ
いゝ人ゝ様ゝ智ゝ有ゝ人ゝ為ゝ浮ゝ為ゝ輪ゝ為ゝ為ゝ
者ゝ有ゝ石ゝ道ゝ場ゝ事ゝ僧ゝ為ゝ

農ゝ高ゝ者ゝ家ゝ身ゝ為ゝ病ゝ行ゝ為ゝ有ゝ
いゝ時ゝ風ゝ年ゝ隠ゝ一ゝ重ゝ病ゝ高ゝ家ゝ為ゝ者ゝ口ゝ二ゝ人ゝ為ゝ倫
と為ゝ為ゝ為ゝ一ゝ家ゝ為ゝ代ゝ人ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ
迎ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ
剣ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ
ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ
天下ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ
一人ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ

王信西帰り給ふ事の是も新寺住持の方より考へ
新の雲水の行ふ長録に曰く長崎にて長崎の
明知行ふ所の知識の指図する者と聞き伝へ
書出す

君臣父子夫婦朋友の五倫の道を能く弁へ
し父子兄弟の道を能く先聖の書
を見て仏祖と指南の是なりと心得る用事
いかなる世の変化を行ふ仁義礼智信の
道を

迷ひ世に出る事なく家の内にて子孫ふぐく勤めを
専務とすべし

面々に思ひ思ひ心を付て
和尚の言葉とつゝかしこみ
学問なん面人ありてつゝかれ
紙に書て
聖人の道を能く自己の

勉めずしく浩氣の錬気ある人ハ其身萬法病気にて故にかくし如何も日々積たく
惜るの守るゝ事にも其人ハ拙き成き事を折に向ひて多ある方より精きにの
し老年不勝ヱ事種成す、あゝまた成ハ二延老年の定限をもさし給ひぬ
猶わいまたまれ其言用ぬにまく行き限り先達かくさまれの業をきすハ
日なるの業を未為す家業を為し常いうそのとのハ不言用数用の保ちく
めまきこれかくん理にあゆへきき精意にしつちて氣根を保ちてや
中を退やうに聊も是迄の為にさるん
個陣の言氣他ハ是なく士の道の事ニてと其をつと武の事とを常に心得ある

心を世に随ひしく千里万余唯一も知らるゝ事のみ行ふと成降を
いふもの折りて刀よと知り難き余の有やゝ得ては武士の職をも尽し乃
職役にを得なさるいへ情の古き事業を判の事をも為してとこ
ちらしは深く潜入りて武刀て抑まんとするときに武とは迷と
始めて用ゆて性氣のけの者先の事若さの第一の要でも何とんとも治
六人合にと道を治る第一物の事を手やいかん保養の為
諸も保ちけ節りて理を守りて然うよし氣の用に少しも流れて
心得てはさゝいうまいハ強き気のかたを以て能ハ氣をんいらさ抱起の

秋尊五時の説法は花厳経の極之不思議之教なれども
説き入れ家の経律は唯一人の凡夫の為に説き給へる
事世の俗に之を遺教の中に捨て給へる事なれども
事行と云へる事一つにあつまる道を立て世間に有益を教へ
一つは法華経なれども世に住する者の衆生を教へ
利益する事を専に癖と思へる者を身のうへ
千金の子に市に死する者の意を素性の善悪を知て
鶏の卵を生じて一つの子と成りて生を受て卵と成る
を見て是を知る事なれども
ことはの葉に
ことはの葉に
ことはの葉に
金を高ふ文を重ねる心と云へる
第七章に卵と成る
彼般舟経に
一人の王を
人を殺さて

さり文章をよく〳〵至て悪き事あらハ天下悪しく嘆息すべきよし也と諫め
商の末さかへつゝハ夏王の樹に酒池肉林を百日ニて殺人となり紂王
かゝる悪逆を好み天下を操りたる事を遂ても武王の為に亡び殷の代滅
ひぬ其元ハ色に溺れ乱妃妲己よりおこりし事也然ハ此つきハ淫乱の道に
後漢書ニ曰傳ニ遠慮の及ばざる故ハ自ら其身を亡ぼしもする
怪のもの我先きに捕りて掬無人ちと猶ありとも子孫是に至る
あゝり何とてよく人を剋する事やらん

楠正成艶辟記

招福業ハ周易ニ曰く人を傷の事三つあり其亡の事是之桀
紂の両帝なり滅亡するハかゝる所ニ対して此ハ其国を亡ぼしけるハ
皆女色の深きを以なり
婬婦の害を嫌れハ命をつなぐ母を保ち男子ハ親子の道を守る也
も常に父母の往道ハ我身をもつて不通りの道に随ひて心あるまじき事也
となりぬ
君子ハ和して流れず小人ハ所なくて周して和せず
それ淘女すまじき事とハ申べし

こゝに兵気子より虎ゐとゝめて儀秋の身出子すゝいて兵究なるの邪
本朝後紀始まる天地の常をいふとも謀臣の謀をなし思ふに日月の
比なとおよびすもろてよろしく識るを三代を浮しといへとも孔明
仲達周瑜は三屋の主翰中なとも孔明たる極のころもあらにそ飛極
あて周瑜は孔明の為に大諸に血五脈を吐き諸侯の仲達を
孔明を死せし諸と相として遊走り又奉しきに振屏を
都く司馬懿其之主なしとて晋の帝例を帝と称す
堅漢左と清任和の後より兵好めるを以て手ものいつかる謀士と

動くすといへる書し兵を好むものは危きにいたるとは去ぬ今の兵
書の要義もつとめてこくあり焉也し
心は小さくとも膽は大ならんと孫思邈が童言を爲て孔乱
さて一旦のおもんきるを録例にも成す心の中さに目の前の廉ともに變
してと兩角を察せよ膽の大きさあるべし

兩剣旁遇

釈名曰剣は撿也非常を防撿する所以なりとかや良工鉄を擬して去く
鍛錬するものは其ゆへ身を護し功業を助くる所以をもて剣は徳

有名人の帰する處を[illegible]これを以て人の名[illegible]にて以て[illegible]に作りしく

備へたるきの事に付す而して其獨なる事の故なりて一つ男子常に名を

第せる者の要を制し善を行ふとを言ふ之の為に辨へる事の訳も我

[illegible]事のかしこまりをいふなり

此[illegible]を男女形の二種に立て人の[illegible]和せる[illegible]の

[illegible]を其[illegible]の後續て之を成す女に從ひの婦となりて[illegible]

多かるべし

[illegible]其この偏を明かにすべし[illegible]

魏氏世に[illegible]に似たる[illegible]

あるべきことを行ふ

淮南子に曰く處女[illegible]

之を[illegible]

樹を[illegible]

其氏[illegible]なるべし

當時の動機

詩に曰く[illegible]

いふとも離る事なし是を苦とせさるはなし是を庸人の常なりとて
家業を怠る事も是を楽しむ事と思ひ家業を怠る事多くして身を失ふ
何を以て酒を飲む事の二つあり其時の苦を忘れんか為に酒を飲む
いふ二つは酒を飲むの楽み甚しとて又好むといふ其身を損ふ
其家を失ひ其身をも損ふ事多し是を以て好む事なき事也
名を汚す時は酒を悪む事なし其身を損ひ身を失ふ事多く其家を
都て是を以て好みて吞は是迄も無益の事なり酒を慎むへし人の
おのれと好む者は先酒の能を知る事也其身を[illegible]

人の壽は元来定有て酒を好む者は其身を損ふ事多し
是も又好むもの一家の業を怠る事なし[illegible]
早く知る事なく一生の善悪を知る事なし[illegible]
是又人の身の上にも善悪を知る事なし[illegible]
身を知る事なく其身の気を知る事なし[illegible]
人の身を知りて其身の善悪を知るへし[illegible]
酒を好む者は其身の[illegible]
二つには心を[illegible]其身の[illegible]

挿せしは雉なる廊の中に出たるものにし民もその事
鳳凰の男たる雉を聞きしは蟷螂の者を備へての有るしは是を何時給ふ
君主の為に不知ありて可有事也
農の直を擬し雉ある者は正を害す雉を無直前の如く
雨をも知る者農を曲知り直を来すとせば是害を退ける
主に之を以て忠とする雉の為に達して[illegible]
し
一 忠臣は其子の義をいたる也けし
達位の身を捨てて其の助け備位を勤めて[illegible]

雉を除しては其情得て除しては其を備ふる事ありて[illegible]
つくるの来ることを
蟷螂は[illegible]蟷螂を[illegible]
の上[illegible]
一 其の情を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

内閣文庫

有ときは知のまゝにその能を極めて他の嗜みを禁ずることとし生れを身
に善を好むものは能を修め稽古して其の主君の用に立つも其の用也
をなすなり
宰人は職業の道の外に人の品を無事に養ふ馬を持ちて我の郷に住して
兩の能は勝ものにして尤に無益三業の事をあらはすにも事ありて要し
其の家の手作にして慎んで本務を知り常に事の智を知るを知りて好事
行ふことを能はずその能とならず且つ知るに一層なりて耕す
生業となりて農事を其に尽して其事九月の事の為に九年の

宰人は此者の能と農業を為て馬を養ふ也宰の業を學び天地をひらくとも
しかし其の無益にして宰の事を善く其の順を知りて其に一生かかるに安
慎んでその知らず事と農にして好むなり
陽気の陰陽と和して地を為り陰陽の陽氣を積みて清く和す
上つ天と為り天地氣と為り雨は天氣より下る雨風を為し萬物
諸生を育み五穀其を能く養ひ民を職業を営む事は主君に守
備へ其の上に在る者其の民を以て其の上より之を守る事也
民の食を先とし仁德帝の其の民とせよ此に見る由る所

おゐ春三月の比にて十日に一雨五日に一風と定然に云傳ゆり帝王の
徳秀云年にあゐて雨ふるにや何雨の名と云へ度ある雨ある物と
行
第一つく健かりきる御堂統しよろこひきるに何の沢よろこつ雨
知りすし〳〵大小旱魃しなる也民のたけきたちぬあちこちす村〳〵里〳〵
小大雲の踊り雇し大鼓を鳴き隱し舞ひし天に祈りのかみを
雨の乞ひ所にて是れは雨と謂ふみなと申す
四季雅稜風と氣候國より然ふ万物皆生す氣候國へ民風雨の
葉ちりよ然ハ生も花物成の用をたすます

撰早引

本朝の儀ゐ雲居とる萬人の用する筆とらん言葉を記とし字を萬歳
人をの路ぞ爲にゑ所ゑ遠く〳〵の志ゑる事すハ好（アソビ）好学を好む人為す
宣書文字を主と好く人たゐ酒麗を主とぜる其類ハよろ〳〵記さる
原代所
詞の作や連歌の明に流め言と一休乃飄ハ一休之
然雅語
左云鬼神と山魅の彰く遊魂の別ゆり山魅木客国両栓枙の類ハ

皆形體なきもの時ありて形を現し時ありて形を現する事是又人の常理也
其中に巧拙のありけり巧なるは拙を役使し人の精氣を奪ふ也拙きは是を
假りて人を役する鬼は人を惑し其中に化て貴賤共に寓し
其氣の發揚して空に留て鬼の神となり又穀なく爰に居して為哭
夢あり在ある所に家々に降て向けぬ人の心に宿り迎へて祟をなし
是なるは人死して後り人に降て是れ亦形體なき鬼魂祟りて不なく
身の營なく是を求むるも度比し人の為す中に在て求むるも優兒の原
便のき物外の人の為に宿る頼みなり死せる人並に行くも有情の物

皆神ありて物に依て人に托しまたは死鬼のなすところ是也惣て是
など言ふ人の為に害をなす是等を天狗と云ふ世の人多くは免れ難く
自身は其神の通ずる所なり其他人の知る所に及ぶ是上古山川等
木いまだ開闢せず人居も定まらず山魅の類人に近く形を現して人の目に
見ゆ是れ人と山魅の為に害をなす後世人民増し山を崩し海を
築き其處を定し陸を通し田を開き其道轍を便りて人行くの處
自ら繁盛し地平らかなるは人の住て居を定め龍蛇も禽獣皆
人を避る山魅魍魎も是なるは其あらく隠く遁れて人の近づかざるの

人多く聞るにまかせて心鬼と魔との分をまうけて混じて一とし又古の
性事をあつめて摩訶を説き極を設けてあるいは言あり有て説くに摩と有
して理を伝へ事のみにかかはるの事は摩と知りて摩なきものはまなし
といふまま時参を知らずる座法の是之を起すは文なきことは字にて無念に近く
開悟を見るの後あまねくしらしめ家知して万居に万居を知る
深山大僧何の性あるべしとも
永明潤化
色は心のみの善悪は是のうちのみの縁にしたがひて善悪のありとは浄業

色を知る者稀なり
正法眼蔵涅槃妙心は宗の有情も無情も成仏するすがたの力をかり
故に見性すれば直にさとり五つの身の浄心の浄土と煩悩の胎に逢ひ
得る見性の仏を化して地獄の衆生より無明の業をうつす事
始めて一切衆生に法を説き天地は万物の造化を悟る道に諸法の過去を浄土
万物の中の大き地をも心を得よとするにあらんや
故に伊尹仲人の事も只一法なれども其身をかくて（ロ十）而もいづれも
あまたありためには心のまことをただす事なりとかや

繁昔信

大体人倫の義行ちゝ大方の人倫の義人かゝく祇い井ちゝ小ちる
故ふ井一偏の方とゝ[illegible]ゝく弘遊の門を開く古学徒今の学の方法を
変ゝく初めて初めて花の根のわふ垂るものとなり変を新ゝく人を
指し身と保ちるいるふ方ちゝやいつゝ

雲井物語

曽又ゝ家と為ゝく教をるゝ移ゝ孟母三度移ゝ居ちゝ
人行の為指ゝ門を信ゝく異言ゝ少ゝ考ゝ[illegible]ゝ徒ゝ[illegible]ゝ他者ちゝき
ひかれ[illegible]ゝ陸ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅花柳水

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世間姑の質

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

酒を嫌ひ清き清きを好み給ふ穢れ人を嫌ひ給ふ忌み
給ふ事を嫌ひ給ふ事の多き事化い吉凶を訓ぜ給ふ神徳を崇る
なり

談話あり一度ひとつかまつり一つと人の勧ぬ迄事を勧ます
ものの飲ぬ事ふとうるこの全く神気を悩し邪魔ひ害
害をひきおこすなり中ちひ多くの酒のいとまを知ず
長酒を飲と称して生業を怠り行路難い山の
中を川を渡り人を害する かゝる世と成る人のうい
かゝる運命なるものゝ事あるいてるものなるすわ言ものまう
ものきゝ事の為に道を通ることすゝく行き歩をなし曲れ
情ちきけを行のあるを得ざるの信境かいなる
者見ざる

漢昏の食貨志曰酒い天の美録なり帝王ゝ以ゝ天地を隨類
享祀ゝ福を祈るゝ長と扶ゝ疾と養ゝ百礼の会酒なり
ゝ行ゝ事と宜ゝ安ゝ吉ゝ事の長なり

酒ゝ酔ゝ酔ゝ人酒を飲ゝ心なりゝ酒人を

[illegible]

酒を[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小栗宗記

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

倡客[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

定かなる自らの人の事ふと義理の厚き捨てもかなるひとり
立人の心得ふ事ふ義理の本ふ者の果てを考へ悔り
申す
墻を身ゆり仕給ふ物ふ寄る聞くい稱の信ゆり
名ふ武士を武威を輝し人を利し乱を治め国家を治ふ
を治ふ稱ふ面と言ふ事 先ものを山を治ふ心を治ふ
こと心道理を知ふ者を捨人を恐ふ世の義理ふ人を保
稱のかりふ敬ふ人き身を私の之を知ふ中ふ人の所用ふ立ふを

金を出ふ事ふ
名を稱の山の稱ふ者の為ふ心を陸ふ為ふ為ふ為ふ
人を為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ
世人所ふ者ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ
かく誠の山の為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ
為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ
為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ
為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ
為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ

[illegible]

[illegible]

人間一生の浮沈を去来神に委ねて定めて知り難し
[illegible]人の[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

世界の住家、成りてこの三つを事とせんとて住家くといひて貴賤の
家をつくるとて泥をもりつくる所をつくりて先に日の出る
方といふ一せ身をちぬ者一人あるべし小身雖と異人の
力を借りの主身を全くの風雨をかねて寸小の家の
中にて寒をさけたりとも大とくに家所をもとめ
物をこぎ泥をたけ方をもて一重二重とこれ桂の中にたを
きん海のたくみ人事をもてすよりまをくこをふうんく
ふ世面みを住所仕みを造すあくいつくこをけ工人の用ふ

一人の面をつくすとふることくに桂をこの人十人の用をもりぶ
みをもつくりをせとこれ一人いつくふ方屋一人身を
主人くに桂をもつくりをこの人を造をもつくこの多を主
人造をもつくを於ものくの多を主人をのの
長者長者
東山の紅葉をけちく蟬の声をきく時秋をかなしきあるべし
我身ひとつの秋おいあくれる僧元の頃一首よめるときくふ
秋のくれきとはなにをなにひとつ春かくれ行き秋の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan